

令和8年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全15ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名

問4 次の空らんには当てはまる言葉を後から一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 絶対に合格できるだろうと高を（ ）。

ア のぼる イ 決める ウ くくる エ 止める

② 財布は落とすし、学校には遅れるしでふんだり（ ）りだ。

ア けた イ とんだ ウ まった エ ふまれた

問5 次の文中のぼうせん部と同じ意味、用法の助詞を含むものを後から一つ選び、記号で答えなさい。

足のけがで|学校を休む。

ア 母は大きな声でさげんだ。 イ おりがみでつるを作る。

ウ 台風で木がたおれる。 エ 国立競技場で試合をする。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

「植物」としての人間。空気の流れと、食べものの流れにたゆたい、無数の触覚しょくかくのような根をめいっばい伸ばし、自分に取りこもうとする人間。植物学者の塚谷裕一つかやひろかずはこう述べている。「実は、植物の生命と動物やヒトの生命とは、そんなにちがわない」。こんな人間像を私たちが産業革命後の数世紀で失ってきたのだとしたら、やはり大きな損失だつたといわざるをえないし、現在の環境破壊かんきやうはかいもここまでひどくはならなかつたかもしれない。

ここで枯葉剤かれはざいに帰ろう。あるいは原爆げんばくでも水爆でも水俣病でもイタイイタイ病でもチェルノブイリや福島の原子力発電所の爆発ばくはつでも、それは変わらない。これらの災厄さいやくは、いつも、人間世界の「中心」から遠いところで起こつた。広島も長崎も富山も熊本も福島も、日本社会の中心である東京から物理的のみならず、心理的にも遠いところに存在した。そして心理的な距離きよりの方がより深刻であつた。マーシャル諸島のビキニ環礁※かんしやうも、ヴェトナムも、ワシントンDCからの距離は月よりも遠かつた。カザフスタンの東部にあるセミパラチンスクも、ウクライナの北部にあるチェルノブイリも、モスクワからはるか遠い場所であつた。だけれども、それらの場所ではどんな人たちがどのように暮らし、そこにどんな生きものがいるのかさえ関心を持つとよくなかつた。そこで、圧倒的な科学の力に裏打ちされた暴力が、「人権」を粉々に砕きくだ、植物と人間の境界を揺るがせた。それによって逆説的に、高度な科学技術を手にしてもなお一塊の植物として世界に根を張つてしか生きていけないことを人間は学んだはずだつた。小学校で植物についてちよつと学べば誰にでもわかることを、あまりにも甚大な犠牲げいせいを払つて学んだにもかかわらず、また忘れようとしていた。

くり返そう。人間は、肺に溜めた大気に毛細血管の根を張り巡らして酸素を取り込み、土壌や海から集めた生きものの死骸しかいを消化器官に取り込み、消化器官に毛細血管の根を張り巡らして栄養素を取り込む。枯葉剤は、放射性物質と同様に、私たちの肺を冒し、食べものを冒し、胃腸を冒し、血液を冒し、生殖器を冒す。土壌、海洋、大気、体液。私たちが、お風呂のようにどつぷりと浸つている世界を例外なく汚染おせんしていく。これが枯葉剤の恐怖の本質であつた。にもかかわらず、そんな薬剤が「人畜無害」として散布された時代が、進歩的な時代とされてきたのである。

※ コッチャも引用しているドイツの哲学者のペーター・スローターダイクの著作『空震テロの源泉にて』(御茶の水書房、二〇〇三年)は、第一次世界大戦で毒ガスという兵器が使用され、それが殺虫剤や農薬として使用されていった時代を、空気の管理の時代、X「空調」の時代だと論じている。「エアコン」の時代といつても問題なからう。人間が当たり前のようにどつぷりと浸つている条件を変えるようなことがなかつたのが、一九世紀までの地球の歴史だとすれば、二〇世紀は、人間という生命体が、大気や土壌や海洋にさえ大きな作用を与えうる存在になつた時代だつ

た。工場の煙突から排気されるガスは大気を黒く染め、工場の廃液は海を茶色く染めた。それだけではなく、フオスゲンは人間の呼吸を止め、マスクアードガスは、皮膚をただれさせることで皮膚呼吸機能を著しく低下させ、シアン化水素は血液の酸素運搬能力の働きを阻害した。毒ガスの転用である農薬は、農業従事者の健康をむしばみ、土壌内生物の活動を弱めてきた。

私たちが植物として浸っている世界は汚染されているものとみなされ、マスク、フィルター、空気清浄機、浄水器やエアコンによってなんとかその境界を保とうとしている。鉄筋コンクリートとガラスとマスクによって汚染と自己を区切ろうとしている。

Y、食べものは鉄筋コンクリートの隙間を通して私たちの胃腸に運ばれ、空気も換気扇を通して運ばれてくる。だから、農薬から逃れた有機農産物と、空気の綺麗な場所にある家やマンションの部屋と、ミネラルウォーターが買ひ漁られる。さらにこれらは、肉体的に害の多い労働によつて作られた食べものとそれを食べる罪の意識から逃れ、じつくりと浸れる世界を用意してくれる。コッチャは述べていないが、浸るには、お金が必要であり、浸ることは、もはや、ビジネスになりつつある。一種の植物である人間は、もうちゃんとその市場まで確立しつつあるのだ。

それにしても、世界に浸ることがお金でしか確保できない時代は、なんと厳しい時代だろうか。

ここでもう一度、植物の特徴を思い出しておきたい。マンクローによれば、植物は知性を、つまり、問題を解決する能力を持つという。それは、問題から逃げないで、問題を解決する能力であった。根を持ち、環境に浸ることが本質である植物に、そもそも逃走という選択肢はありえないからだ。植物は、周りがどれほど汚染されていても、死に絶えるという結末を迎えぬために、あらゆる手段を探つて、最適解を求めてきた。しかも、人間にはできない芸当だが、体内に捕食者にとつての毒を生産することさえしてきた。タバコのニコチン、コーヒーや茶葉のカフェイン、トリカブトのアコニチンは、人間が利用した自然毒である。

だから、植物にとつて逃げないというのはもちろん、座して死を待つという意味ではない。そして人間もきつとそうだと思う。

第一に、毒の発生源を確定し根絶することである。人間は、「足のある植物」として、植物に依存しながら、世界からあらゆるものを吸収して生きていけない。ただ、一方で足を使つて発生源まで移動し、調べることができる。人間の環境全体を汚染する物質の開発が二〇世紀の特徴であったとすれば、今後は、浸りを阻害する科学技術全体の見直しという課題が私たちに肩に重くのしかかるだろう。

第二に、それでも環境に残留する毒を分解することだ。毒の分解とは、植物にせよ、動物にせよ、個体の極めて重要な機能であり、生態系による連携プレイの機能でもある。人間は生産に力を入れすぎて、分解の能力を置き忘れてきた。フィルターや浄水器や空気清浄機でいくら物理的な壁を作つても、自分の体内の免疫が弱ければ、外敵は侵入しやすくなり、Zの始まりとなる。

コッチャが述べるように、植物だけが世界を作ることができる。中村梧郎が一九九五年にヴェトナムを再訪して、あのマングローブ林に妹に支え

られながら立つ、成人になったフン少年を撮った写真を見ると、その背景にはわずかではあるが灌木かんぼくが生えていることが確認できる。残りの土地はエビの養殖場ようしよくにされたという。植物の力で不毛の地に生命いのちが蘇よみがえった、という言い方は、ここでは当てはまらないだろう。

だがそれでも、いったん植物までも死に耐えた地に再び生命が芽生えたとすれば、その主導的役割を果たす生きものはやはり植物をおいてほかない。

(藤原辰史『植物考』)

※枯葉剤……除草剤の一種。アメリカの植物学者、アーサー・ガルストンによって量産され、化学兵器として軍事利用された。

※チエルノブイリ……ウクライナ語では「チヨルノービリ」。ウクライナのキーウから北西130キロメートル、ベラルーシとの国境付近に位置する。

※環礁……環状のサンゴ礁と、そこにサンゴの破片などが堆積した州島たいせきからなる地形。

※セミパラチンスク……旧ソビエト連邦れんぽうのかつての主要な核実験場のあった場所。

※逆説的……一見すると真理に反しているように見えるが、よく考えると真理をついてるさま。

※コツチャ……イタリアのフィレンツェ大学博士。

※ペーター・スローターダイク……ドイツのカールスルーエ出身の哲学者。

※フォスゲン・マスタードガス・シアン化水素……人体に悪い影響をもたらす物質。

※マンクローゾ……イタリアの植物学者兼作家。

※ニコチン・カフェイン・トリカプト・アコニチン……人体に悪い影響をもたらす物質。

※免疫……細菌やウイルスなどの外からの異物を識別し、体内から取り除くことで体を守る防御システム。

※中村梧郎……報道写真家。

※あのマングローブ林……ヴェトナム戦争後に枯葉剤の効果で枯れ果てたマングローブ林のこと。

問5 ぼうせん部④「人間もきつとそうだと思う」とあるが、「きつとそうだ」が表す内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間も捕食者から身をまもるための最適解を求めていくことで、毒の生産が出来るようになるという考え。
- イ 人間もただ座して死を待つのではなく問題から逃げ回ること、最適解を導き出せるようになるという考え。
- ウ 人間も最適解を導くためではなく、環境に浸ることによって、死に絶える結末を迎えずにすむという考え。
- エ 人間も植物のように、生存するためにあらゆる手段を探って、最適解を求めていく知性があるという考え。

問6 空らん [Z] には「両者が同じようなことをしあつて、なかなか、決着がつかないこと」を意味する、動物の名を用いた慣用表現が入る。その表現をひらがな六字で答えよ。

問7 本文における、植物と人間の共通点と相違点^{ちがひてん}について説明した次の一文の空らんにあてはまる言葉を、 [い] は十七字で、 [ろ] は七字でそれぞれ本文中からぬき出して答えなさい。

共通点は人間も植物も [い] (十七字) こと、相違点は植物は [ろ] (七字) ができるが人間にはできないこと。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

見慣れた黒い軽自動車が、玄関の前に停まった。助手席と運転席、それぞれのドアが開く。

「あ、お母さんが来た。妹も」

傘をさす妹と母が片手で手話をしている様子を見て、生徒のひとりがアタシに視線を向けた。目が X といったように輝いている。

「陽子ちゃんのお母さんと妹って、なんであんな風に手を動かしてるの」

「妹は耳がきこえないから、手を使って話すんだよ。手話っていうの」

「じゃあ、陽子ちゃんも手話できるんだね!」

できないわけではない。でもアタシは、頑なに手話を使わなかった。何ひとつ文句を言わず、笑顔の「盾」をかざっていたアタシの唯一の反抗は、母と妹のコミュニケーション手段である「手話」を拒否することだった。

手話を使ったら、母と妹「ふたりの世界」の住人になることを意味する。母にふり向いてもらいたくて、ひとりでがんばってきたアタシにとって、自分自身を否定するようなものだった。

家族も、アタシは手話ができないと思っただけでなく先生たちまでもが一斉にしゃべりだした。

「えらいね。陽子ちゃんがしつかりしてるから、お母さんも安心だ」

「妹さんの分もがんばらなきゃね」

「陽子ちゃん、お母さんや妹さんを助けてあげるんだよ」

次々におそってくる善意という名の刃には応戦せず、笑顔のまま後ずさった。

「はい! じゃあ、お先に失礼します!」

礼をし、急いで母の車に乗った。

別にえらくない。しつかりなんてしてない。

がんばるって、これ以上? そんなにアタシががんばっていないように見える?

助けてあげる? 自分は今まで助けてもらえなかったのに。

「お母さん、早く出して。ここ駐車禁止だよ」

後部シートに背中を預け目を閉じた。エンジンの振動に身を任せ、少しずつ心を落ち着かせる。

……でも、お母さんはわざわざむかえに来てくれたんだ。

ちよつとだけうれしくなって目を開ける。赤信号で車は止まり、助手席の静香に母が手話で愚痴っているのがシートの間隙から見えた。

(こんな豪雨の時に、車の運転なんかしたくないよ。バスで帰ってくればいいのに)

稲妻が闇を切り裂いた。落雷の地響きが足から伝わって、体を抜けていく。

笑顔、笑顔。笑っていれば、辛い気持ちも逃げていく。唇が震えてくるのを噛みしめて耐え、口角を上げた。

家に着いても雨や雷の勢いは衰えない。稲光が漆黒の夜空を照らし、落石のような雷鳴が轟く。

静香が泣けば、母が抱きしめる。でも、自分はどこで安らげる？ どこで涙を流せる？

居場所なんてどこにもない、受け止めてくれる人なんてだれもない。

もう、ひとりでもいい。今までもそうだったじゃないか。

このまま空に駆け上がっていきたい。闇夜に姿を隠し、響きわたる雷鼓に泣き声をかき消してほしい。そう願っても、神様は叶えてくれるはずもない。結局、自分の部屋に籠って大泣きした。

期待していたんだ。お母さんは喜んでアタシをむかえに来てくれるって。「陽子、かるたに熱心なものいいけど、雨が降る前に帰ってきなさいよね。心配するじゃないの」って苦笑いして、どこかホツとした表情を浮かべながら。そんなの、あるわけがないのに。今まで生きてきて、分かり過ぎるくらい分かっていたじゃない。アタシって本当にバカだ。

すると、母が部屋に入ってきた。

「陽子。なんで泣くのよ」

やっと母がアタシを見てくれたのに、それが今だなんて。泣き顔なんか見せたくない。クッションに顔をうずめたまま答えた。

「なんでって……」

自分で分からないの？ と言いつつ終わるのを待たず、母は絞り出すように言葉を出した。

「これ以上、お母さんに気を遣わせないですよ。ただでさえ大変なんだから、家では静かに休みたいの。陽子はきこえるんだし、ひとりでもできるでしょ」

アタシが自分を守る手段は、笑顔だ。それしか知らない。

顔をゆっくり上げ、涙を拭くと母親を振り返った。

「分かりました。もう何も言わない」

最高の笑顔を浮かべて、そう言った。

大きな雷鳴が響き、瞬時に闇に包まれた。停電の中、母の姿が稲妻に一瞬照らされたけど、顔は見えない。ただ、力なく下ろした両の拳を握りしめているのだけは分かった。

その日以降、アタシは母との冷戦に突入した。自分からは話しかけないし、話しかけられてもまったく口をきかない。笑いもしない……つもりだった。しかし気が付けば目尻は下がり口角が上がってくる。笑みはもう顔に張りついているのだと思いきらされた。

明日から夏休みなのに。こんな状態で家にいるなんて最悪だ。

ふと、思い出した。「純喫茶 ベラトリクス」にアルバイト募集の張り紙があったことを。営業時間は、朝七時からだった気がする。通勤途中の会社員を相手にモーニングをやっているのだろう。

翌朝、自転車に乗って一路オリオン通りを目指した。夏の早朝のしっとりした涼しさも、全力でペダルを漕ぐアタシには役に立たない。

「おはようございます！」

思い切りお店のドアを開けると、せつせとカウンターを拭いていたオーナーは目を丸くした。

「おはようござ……あらあら、汗まみれで！」

あわててタオルを出してくれたオーナーに頭を下げ、汗を拭いながらアタシは言った。

「あの、まだ募集しますか？」

壁にあるバイト募集の張り紙を指さすと、オーナーは首を傾げる。

「あなたが？」

「はい。ぜひ！ でも、夏休みだけ……高校生じゃダメですか」

「……いいえ、人手不足で大変なの。今日からよろしくお願ひするわ。あと、自転車じゃなくてバスで通いなさい。交通費は支給するから。今の時期の宇都宮じゃ、帰るころには夕立だもの」

さっそくアルバイトが始まった。うれしいことに、朝が早くて夕食どきまで仕事だからと、三食の賄いがつく。母を無視し始めてから家で食事を④するのがうつつとうしかったから、渡りに船だった。

担当はホールとレジ。接客業が初めてのアタシには、なかなか新鮮しんせんだった。何よりも、厨房ちゆうぼうの様子が楽しい。オーナーの見事な手さばきで料理があつという間にできあがる光景は、魔法まほうみたいだ。ホンのちよつとした盛り付けの工夫でお客様が喜ぶのも心が弾はじんだ。

「陽子ちゃん、この紙を外向きに窓に張かつてくれる？」

渡された厚紙には、クレヨンで描かいたららしい可愛い丸パンの絵があつた。「午後二時から」と文字が添そえてある。絵も字も上手で、思わず見入いってしまう。

「丸パンですか。メニューにありましたっけ」

「気まぐれメニューなの。販売はんばいする日には、この絵を飾かざるのがお約束なのよね」

朝張あさつたら、販売前には行列ができていた。おどろいて、窓の外を眺ながめながらつぶやいてしまった。

⑤「いっそのこと、毎日焼けばいいんじゃないですか」

ほほほとオーナーは笑う。

「毎日あると、意外に来てくださらないのよ。メニューもそう。何かひとつでいいから日替かわりがあるといいのよね、常連のお客様のために。それと、季節の移り変わりを感じるものがあるといいわよ、お花とか。成長を見に通かつてくださることもあるし」

バイトをしていて気づいたけど、ご新規さんはあまり……というか、ほとんどいない。常連さん、それも年配のお客様が、話題が豊富で聞き上手のオーナー目当てに通かつてみるみたいだ。朝、昼、夕方で客層も変わるのが面白い。モーニングは、役員風のおジさんが多かった。

「あら、高橋さん。今日はいつもより顔色がいいんじゃない？」

六十代くらいに見えるスーツ姿のおジさんは、首を回しながらカウンターに座まつた。

「肩かたこりが解消したからかな。昨日初めての床屋とこやに行いったら、肩もみサービスがあつたんだよ。マッサージが終わったらすごい楽で、自分自分って肩がこつてたんだ！ って衝撃しよつげきを受けたよ」

「もう自覚自覚すらなくなつていたのね」

オーナーが笑いながら淹いれたコーヒートを、アタシはバタートーストといっしょにカウンターに運たんだ。

「肩こり状態が普通ふつうだから、辛辛いさは感じてなかったんだね。逆に悲しくなっちゃったよ。この解放感解放感を知らなきゃよかったって」

「それで思い出したわ」

オーナーはカウンターに来て、『星三百六十五夜』というハードカバー本を取り出してパラパラめくる。

「一九五五年（六月二十日）に伝説の皆既日食があつたの。皆既時間七分八秒という長さで、どれだけすごいかというと、一〇八〇年六月から二一五〇年六月の間で一番長いという」

「へー」

アタシも高橋さんもすごさが分からなくて、流した返事をしてしまった。しかし、オーナーはそんなの気にならないらしく、どんどん饒舌になつていく。

「セイロンに行った日本の観測隊は、悪天候で観られなかったんですって。でもね、南ベトナムで観測されたの。このページの内容がその時の話よ。太陽が隠れ、星が輝きだした。金星、牡牛座のアルデバラン、オリオン座のふたつの一等星リゲルとベテルギウスも見えたはずだよ」

「オリオン座って、冬じゃなくてもあるんですね」

「そりゃそうだろう！ 流れ星じゃないんだから」

高橋さんが失笑しながらトーストをちぎるのを眺め、オーナーは優しく微笑んだ。

「冬の星座だつて、今の時期でも早起きすれば見えるわよ。太陽の光で消されても、確かに天を周ってるの。この皆既日食で七分間だけ夜が訪れ、黒い太陽の周りに一気に星が現れて消えた。素敵じゃない？」

「確かに……」

想像してみた。昼と夜が瞬時に入れ替わり、空に輝く太陽が星座に代わり、そしてまた太陽がもどる。天文学の知識はないけど、実際に見たらどんな気分になるんだろう。

コーヒーステッカーをすすると、高橋さんは傍らのオーナーを見上げた。

「で、それが僕の肩こりとどうつながるの？」

「明かりが消えたから、見えていなかった幸せに気づくってことよ」

「肩こりを自覚したから、肩こりがない幸せに気づいたってか？ ママさんは、なんでも星の話に持っていくなあ」

「きらきらしてて、いいでしょ」

オーナーと高橋さんは、あははと笑いあっている。

アタシは、ちがうことを考えていた。

自分は太陽のように家を照らそうと、無理していつも笑っていた。だけど、笑顔を消したら、何か見えてくるものもあるのだろうか、と。

答えは出ないまま、夏休みは過ぎていく。

(村崎なぎこ『オリオンは静かに詠う』)

問1 空らん X にあてはまる四字熟語として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 温故知新 おんこちしん イ 興味津々 きょうみしんしん ウ 一喜一憂 いっきいちゆう エ 八方美人 はっぽうびじん

問2 ぼうせん部①「笑顔の『盾』」とあるが、これはどのようなものであるか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ふいに発生するアクシデントを事前に防止するためのもの。
 イ お母さんの冷たい視線からアタシの心を守るためのもの。
 ウ 大人からアタシの気持ちをとられないようにするためのもの。
 エ 周りの人からアタシの辛い気持ちをかくすためのもの。

問3 ぼうせん部②「善意という名の刃」とあるが、アタシが「善意」を「刃」ととらえてしまうのはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先生たちの愛のある厳しさは、アタシの今までの努力を否定するものだと感じているから。
 イ 先生たちの悪意のない言葉が、今のアタシにとっては傷つくものだと感じているから。
 ウ 先生たちのアタシへの声かけは、だれが受け取っても痛みをとまなうものであると思えたから。
 エ 先生たちのアタシに対する優しさが、耳の聞こえない妹をこうげきしているように思えたから。

問4 ぼうせん部③「結局、自分の部屋に籠って大泣きした」とあるが、アタシの思いとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんのアタシに対する思いに失望し、自分の苦しみがだれにも理解されない辛さ。

イ お母さんの妹に対する愚痴に怒りを覚え、どこにぶつければいいかわからない辛さ。

ウ お母さんと妹がアタシのことを見てくれず、居場所がないことを改めて実感する辛さ。

エ お母さんに期待していた自分の浅はかさに気づき、生きることの意味を見出せない辛さ。

問5 ぼうせん部④「渡りに船だった」とあるが、アタシの状況について説明した次の一文の空らん にあてはまる言葉を、それぞれ本文中から五字でぬき出して答えなさい。

アタシは母との (五字) しており、アルバイトをすることで母親に対して笑顔が浮かべるといふ (五字) ことをしなくてもよくなる状況。

問6 ぼうせん部⑤「いつそのこと、毎日焼けばいいんじゃないですか」とアタシがオーナーに対して言っているが、これに対するオーナーの思いとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 常連さんが来る時間に合わせてメニューを変更することで、お店に興味をもち続けてほしいという思い。

イ 常連さんが毎日来てもあきがこないようにし、工夫や気づかいをほめてほしいという思い。

ウ 常連さんにあしげくお店に来てもらいたい楽しんでもらうための、話題をつくりたいという思い。

エ 常連さんに気まぐれメニューを食べてもらおうことで、新しいメニューに加えるか意見を聞きたいという思い。

問7 本文の内容として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アタシは、常連さんの豊富な話題にもていねいに対応して受け答えをするオーナーの姿にあこがれを抱きつつ、自分に対する母親の思いを想像することで、新たな考えが生まれてきた。

イ 喫茶店でのアルバイト経験により、少しずつ考え方が大人になってきたアタシは、母親との関係性を見直そうと態度を改めるようになり、見えていなかったものが見えるようになってきた。

ウ 喫茶店のオーナーの星座の話をよくわからない思いで聞いていたアタシは、それに対する常連さんの話を聞いたことで、星座の話が自分にもあてはまるのかもしれないと感じている。

エ アタシは、喫茶店の接客業を通して新しいことにチャレンジする楽しさを思い出すことができ、同時に喫茶店のオーナーからのアドバイスをすぐに実行していかうと思っている。

問8 二重ぼうせん部「笑顔を消したら、何か見えてくるものもあるのだろうか」とあるが、以下の条件にしたがい書きなさい。

【条件1】「見えてくるもの」はどのようなものであるか、本文の内容をふまえて想像して書くこと。

【条件2】想像した理由を書くこと。

以下余白

—